



Y K K

読もう書こう考えよう

みなさんこんにちは、図書館担当の伊丸岡です。3月号、1年間のご愛読ありがとうございます。また、「学校評価アンケート」で、保護者の方から図書館だよりを楽しみにしていただいているとの声もあり、ありがたい限りです。

さて、学校はなにかと慌ただしい時期ですが、反対にみなさんにとってはじっくり1年を振り返り、足りないところを補い、次年度の好スタートを切れるよう準備する格好の時期です。本も読んでくださいね。

災害に遭わず、元気に暮らしたい

3月11日は**東日本大震災**が起きた日です。ことしで丸12年。みなさんは記憶にあるでしょうか？2万人以上の死者・行方不明者を出しました。ご存じのように、この地震では「津波」による水死が多かったのが特徴でした。ボクの教え子も行方不明となりました。

1月17日には、**阪神・淡路大震災**から28年ということで、ニュースで報じられていました。

なんとかこのYKKにも書きましたが、日本は自然災害の多い国です。

鴨長明がその60年の生涯のうちで、いずれも大規模な地震・台風・大火・飢饉などを体験し、『**方丈記**』に記しています。人の一生の間にそんなに災害に遭遇するものだろうか、長明はよほど不運な人だったのか、はたまた平安末期から鎌倉期は特別に災害が多かったのだ、と若い頃は思っていたものですが、じつはそうでもないということが、自分が鴨長明の年齢近くにいたって、実感するところとなりました。

ボクが就職した年、つまり社会人1年生の夏、8月12日に、日航ジャンボ機が御巣鷹の尾根に墜落し、一度に520名もの命が失われた。あれは衝撃的でした。それから幾星霜、災害で言えば

1993年7月12日「北海道南西沖地震」 震度6。奥尻島が津波に襲われ、火災も発生。死者200名以上。

1995年1月17日「阪神・淡路大震災」 震度7。建物などの倒壊が多く、死者6400名以上の9割が圧死。「**通電火災**」が知られることになった地震。

1996年2月10日「北海道・豊浜トンネル崩落事故」死者20名。

2011年3月11日「東日本大震災」 M9.0、震度7。津波最大40m。火災。**原発事故**。

2016年4月16日「熊本地震」 震度7。死者270名以上。

2018年9月6日「北海道胆振東部地震」 震度7。死者43名。広範囲な土砂崩れ、「**ブラックアウト**」

このほかにも多くの地震があったし、火山の噴火もありました。集中豪雨の影響で、たとえば2014年、広島で起きた大規模な土石流災害も痛ましかったし、ボクの母校も川の氾濫で水没。新校舎を建てたものの統廃合で使われなくなりました。南富良野の水害もいまだに鉄道が復旧されてませんよね。日高線は廃止になりましたし。猛吹雪で凍死した災害もありましたね。

事故で言えば、大学生らが一度に15人もなくなった、軽井沢スキーバス事故(2016年1月15日)が痛ましかった。ほかにもたくさんのバス事故やトンネル事故、列車事故、船の事故などなどありました。

考えてみれば、私たちも鴨長明と同じように、一生の間に実に多くの災害や事故を見聞きし、時には巻き込まれたりするおそれもないとは言えない、と思います。

「いつまでもあると思うな親と金。ないと思うな運と災難」

ことしは「**関東大震災**」からちょうど**100年**になります。

1923(大正12)年9月1日。死者行方不明者は10万5000人。密集した和風建築が多かったため火災が多く発生し、「火災旋風」による広範囲への延焼が特徴的だったということです。後年、この日が「防災の日」と定められましたし、地震に強い建築の基準が作られるようになったのもこの震災がきっかけでした。震災関連本、読んでみませんか？ 磯田道史氏の『天災から～』もとてもためになります。『方丈記』もぜひ。

『三陸海岸大津波』 吉村昭 文春文庫 ⇒文庫の棚「よ」

『関東大震災』 吉村昭 文春文庫 ・ 『東京震災記』 田山花袋 河出文庫 ⇒文庫の棚

『天災から日本史を読みなおす 先人に学ぶ防災』 磯田道史 中公新書 ⇒新着図書の棚



～ ことばつれづれ ～

十 軒

「十軒」。家が10戸あることですが、さて、この語を、スマホでもWordでもいいから、入力・変換してみよう。みなさんは「じゅっけん」と打つでしょう。ところが、もともとは「じっけん」なんです。 「実験」「実権」なんかと同じなんです。

むかし、東京の中央区に「十軒店(じっけんだな)」という地名があったそうです。

また、「十時十分」というような、時間を表す「十分」も、仮名で書くと、もともとは「じっぶん」だった。

なぜかという、「十」は旧仮名遣い(歴史的仮名遣い)では「じふ」と書いた。これに「軒」を加えるとまず「じふ」の「ふ」が促音化して「つ」になる。だから「じっけん」なのである。

時間の「十分」の場合も同様に、「十」すなわち「じふ」に「分」を加えると、「じふ」の「ふ」が促音化して「つ」になる。そして「ぶん」の「ふ」は、連濁という現象により半濁音化して「ぷ」となる。よって、「じふぶん」が「じっぶん」となるのである。ちなみに「3分」も連濁によって「さんぷん」というのが日本語の標準ですが、最近は「さんぶん」という人が増えていますね。

スマホで「じっけん」または「じっけんだな」と打ってごらん。ちゃんと「十軒」「十軒店」が出てくるから。

これは、次の本を見ていて気づいたのです。1981(昭和56)年刊行の岩波文庫ですが、巻末にある、岩波文庫の表記原則の説明には、「振り仮名は現代仮名遣いで付す」とあります。そしてP.67に「十軒店」が振り仮名付きで出てくるのです。これは明治19年ころからの30年間を回想したということのようですが、関東大震災前の、江戸の面影が残る東京の町並みや人々の様子が描かれており実に面白いです。明治期の創作小説と違って、作者の体験実録で、生き生きと描かれています。興味のある人はどうぞ。＊国語辞典にも「じっけんだな」が載ってます。

P.9に、「その頃はまだ須原屋茂兵衛、山城屋佐兵衛などという古い大きな本屋があった」と書いてありますが、ボクはこの「須原屋茂兵衛」が出版した本(和装本)を持っていたのでびっくり。本屋というのは、版元でもあったのですね。



『東京の三十年』 田山花袋 岩波文庫 ⇒文庫の棚「た」

ちなみに、ボクは田山花袋の『田舎教師』が大好きでね。何度読んだか分かりません。挫折と貧困のうちに肺を病んで寂しく死んでゆく青年教師の生涯です。実在したモデルがいるそうです。

「四里の道は長かった」で物語は始まるのですが、ボクも真似して、自宅から当時勤めていた東川までの「四里」を歩いてみました。ちょうどその日は気温30℃を超える日で、倒れそうになったけれど、主人公「林清三」の追体験ができたことに満足しました。



そういえば高校生の時、三浦綾子の『塩狩峠』を読んだ際も、実際に列車に乗って峠越えをしたことがあります。その体験を読書感想文に書いて賞をもらった覚えがあります。体験って、モノを書く際のネタになりますね、当然ですが。

みなさんも若いうちにぜひ、いろんな旅を経験してください。できれば「貧乏旅」を!

『田舎教師』 田山花袋 新潮文庫 ⇒文庫の棚「た」

「十」の話に戻りますが、NHKでは、数字の発音の仕方として、「10」を「ジッ」あるいは「ジュッ」と発音する、と下記の書籍(2019年刊)に示しています(P.332)。用例もたくさん集められていて、「分」に続く場合は「ジッぷ」または「ジュッぷ」とあります。pというのは、「プン」という発音を表しています。

『NHKことばのハンドブック』 NHK放送文化研究所 NHK出版 ⇒辞典の棚「日本語」

いやあ、こういうのを調べたり書いたりするのは、じつに楽しい。こんな楽しいことして給料もらえるなんて、幸せな仕事です、ハイ。

自由律俳句

夏井いつき氏の功績か、いまや俳句ブームといえましょう。

ところで「自由律俳句」をご存じだろうか。なかなか国語の時間では扱わないけれども、日本人の教養の一つとして知っておいてもいいでしょう。自由律俳句の名手、**種田山頭火**は漂泊の詩人。ラーメンを食べたことはないだろう。尾崎放哉もまた破格の人生を送った人。ボクは「墓地からもどつて来ても一人」を読むと、どうしても「墓地から戻って来たら二人」とパロってしまう習性がある。二人になってたら、恐いネ。

二人の作品から好きな句を選んでみた。

種田山頭火 「分け入っても分け入っても青い山」

「うしろすがたのしぐれてゆくか」

「どうしようもないわたしがあゝあるいてゐる」

「うどんそなへて母よわたくしもいただきまする」

尾崎放哉

「入れものが無い両手で受ける」

「墓地からもどつて来ても一人」



『山頭火 句集(1)～(4)・アルバム』

春陽堂

⇒文庫の棚(個人のウラ)

『山頭火俳句集』

岩波文庫

⇒今期購入・新着図書の棚

『尾崎放哉句集』

岩波文庫

⇒今期購入・新着図書の棚

山頭火は、山口県の出身でしたが、同じく、詩人の中原中也も山口の出身です。中也の生家があった「湯田温泉」には、瀟洒な「中原中也記念館」が建っており、そのそばには山頭火の句碑も建てられています。湯田温泉、とてもいいところです。

文学を読む 文学者を知る

ことしの1年生からは、新しい「学習指導要領」というルールに沿って、新しい科目「現代の国語」と「言語文化」という科目を履修しています。2年生以上のおみなさんにとっては「何じゃそりゃ?」という科目の名前でしょう。現1年生がこの先2・3年生になると、「論理国語」や「古典探究」という、これまた何をするのか?という科目を履修することになっています。

今までとの大きな違いは、3年間の国語の授業の中で、近現代の「文学」に触れる機会が、従前に比してほとんど無くなるということです。これはたいへんゆゆしき問題であるということを、司書教諭の立場から訴えたいと思うのです。もちろん、文学作品なんて授業ばかりでなく、自分のお好みで自由にむさぼっていいのだけれど(ボクはそのタイプでした。どうも教科書に出てくる文学はつまらない。自分で好きなものを好きなだけ読んでいた高校生でした)。でも、すこしは押し売りされないと、食わず嫌いのままになってしまいますからねえ。



「文学」は、自分では実体験できないこと、他人の人生を生きるということ、小説や韻文などで追体験できる、イメージできるというメリットが**第一**にあるわけです。旅もできます。恋もできます。不倫だってできちゃう。学園生活も社会人体験もできます。異性にもなれるしお年寄りにもなれます。探偵にも医者にもなれます。すてきな人にも

出会えるし、こんな嫌な人間がいるのか、という間接体験もできる。静かな山の中にも入ってゆけるし、沖縄の美しい海辺で風を感じることもできる。固定化されたアニメやドラマ・映画の映像と違って、自分の頭の中で自由に想像することができます。

第二には、知らなかった言葉・表現、知識、教養が身につくことです。

たとえば「養う」の用法に、「家族を養う」「豚を養う」「英気を養う」といった用い方の他に、「子どもや病人などの食事の世話をする」(大辞泉)という意味があるのを知っているだろうか?「食べさせる」ということです。

「母は次男の多加志に牛乳やトオストを**養**っていた」(芥川龍之介全集第3巻P.292「年末の一日」)

「タケの顔をとつと見ながら一匙^{さじ}ずつ**養**わせて」(太宰治『津軽』新潮文庫P.176)

いまの「養う」の意味だけでは、近現代文学すら読み取れないわけです。

これら第一と第二のメリットを合わせると、「頭を使う」、「頭が良くなる」ということです。

第三に、文学者と出合うということです。もちろん、間接的にですが、文学者たちの「人生」に出会えるということです。とくに「文豪」といわれる人たちの「生き方」は、私たちに何らかの示唆を与えてくれます。

病气や死と文学者の関係。

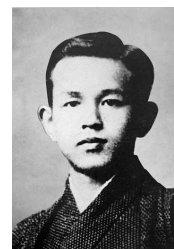
宮沢賢治の作品には、夭逝した妹トシへの哀惜が込められている。**啄木**は破天荒な人生を送ったのに、こんなにも共感を得る作品を残せたのはどうしてか、でも、子どもも自分も奥さんも母親もみな結核で命を落としてしまった時代を思いやってみる。おなじように、幼い子どもを結核で亡くし、後を追うように自分も結核で落命したのは**中原中也**だった。



一方で、避けられた死もあったはずであろう文学者の死。**太宰**のように、薬物中毒や自殺未遂、心中未遂を繰り返す人生はいかかなものだろう。**芥川**だって、**三島由紀夫**だって**川端康成**だって自死を選んだが、それってどうなんだろうと考えてみる。時代による死もあった。**小林多喜二**は戦前、警察で拷問死している。わずかに90年前の日本の話。ふたたびそういう時代が来ているのかどうか、考えさせられる。

市井の人の病や死は公開されないが、こうした文豪たちのそれは公開されてもいる。それを私たちが生きていく上での、なんらかの参考にできるのではないか。そんなことを思うのです。

第四に、あたり前の事ながら、時も場所も超えて、**歴史**を探訪できること。「東京大空襲」ってどんなものだったのか?「ヒロシマ」の原爆の実相はどうだったのか?「沖縄戦」はどのように住民を巻き込んでいったのか、日本軍は住民を守らなかったのか?沖縄戦での戦死者が、沖縄県民に次いで北海道出身者が多いのはなぜか。戦後、アメリカの施政下でどのような生活があったのか?先の大戦に関しても、さまざまな「なぜ」があるだろうと思います。それに応える書籍が



図書館にはあります。記録や写真集もあれば文学作品もある。ウクライナで起きているようなことが、戦前戦中の日本でもなかったか。これからの日本でないといえるか。そんなことを**考えるきっかけをつかめる**のも図書館です。人類の起源も宇宙の神秘も人体の不思議も、**手当たり次第に知識を吸収**できるところが図書館です。

図書館は文字通り、本の館。さまざまな文学作品、知識教養情報に溢れています。宝の山です。**宝探しに来ませんか?**

・・・最終号なので、図書館について、ちょっと一席ぶってみました(「一席**ぶつ**」って、意味わかります?)。

ところでこのページの4人の肖像、だれだかわかりますよね?

どうなる ウクライナ戦争と世界情勢

連日報じられるウクライナ情勢。世界の食糧供給基地ウクライナと、世界の資源エネルギー供給基地ロシアとの戦争が、世界の食糧事情、資源エネルギー事情を悪化させています。罪もない市民が命も家も奪われています。

世界中に物価高騰と燃料不足を招き、核兵器使用のおそれ無しとはしない情勢に不安が高まります。昔の「東西」冷戦ではないが、世界がウクライナ側、ロシア側にまわって対立構造が作られています。その機に乗じてか、北朝鮮のミサイル乱射を、だれも止められずにいます。こんな本も入っています。

『物語 ウクライナの歴史 ヨーロッパ最後の大国』 黒川祐次 中公新書

⇒新着図書の棚

『プーチンの野望』

佐藤優

潮出版社・新書

⇒新着図書の棚

『池上彰の世界の見方 東欧・旧ソ連の国々 解説!ロシア対ウクライナ』 小学館

⇒新着図書

いま、ウクライナとロシアが直接の戦争当事者ということになっていますが、これからの国際情勢は、米中対立、中国の覇権主義、台湾情勢、北朝鮮の核武装など、日本も隣国として不安要素がぬぐえない現状があります。いったいどうしたら平和が維持されるのか、学び、考えたいところです。

本の温もり

厳冬期、あさの司書室は10℃。でも、閲覧室(書架や机のあるいわゆる図書室の方)はほんのり暖かみを感じます。それは、本の温もりです。まるで大量の紙が呼吸していたかのように、あるいは、本たちがパネルヒーターのように、前日の暖まった室温を、夜中中、静かに少しずつはき出していたかのように、温かなんです。

本だけに、「ほんのぬくもり」を感じます。早朝の、本たちとのやわらかな出会いです。

図書案内の図書

図書案内の図書といえば言葉遊びのようですが、要は「読書案内」ということ。どんな本を読んだらいいか、こんな本がお勧めだよ、という本があるのです。現在、テレビそばの表紙を見せしている書架に並べてあります。手にとってはいかがかな。

また、「推薦プロジェクト推薦図書リスト」という、A3版の一覧表があります。これは、「小論文対策コーナー」という、中央部の背の低い棚の上に上げておきますので、参考にしてみてください。推薦をねらう人、小論文入試がある人、進路に関係した本を読んでおきたい人(たとえば教員志望、看護師志望など)、そうでない人でも、教養を身につけるためにこんなリストも活用してみてください。

図書館は他にも、調べたいことにたどり着くまでの選書のお手伝いをする「レファレンス」機能というのも担っています。なんでもとりあえず司書教諭までご相談ください。

そして、このような本から、「この本を入れてほしい」というリクエストをしていただけると、たいへんにありがたい。みなさんが利用する図書、活用してくれる図書をどんどん入れていきたいと思っています。



『読書大全 200冊』

堀内勉

日経BP

⇒新着図書の棚

『みんなの図書室』

小川洋子

PHP文芸文庫

⇒新着図書の棚

『青春の本棚』

高見京子

全国学校図書館協議会

⇒新着図書の棚

『〈自分〉を知りたい君たちへ』

義老孟司

毎日新聞出版

⇒新着図書の棚

『10代のための読書地図』

本の雑誌編集部

本の雑誌社

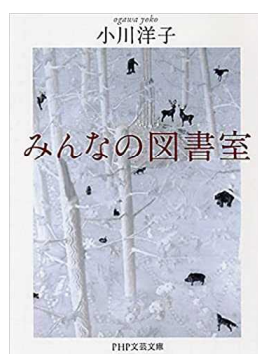
⇒新着図書の棚

『モヤモヤしている女の子のための読書案内』

堀越英美

河出書房新社

⇒新着図書の棚



義実家

最近気になっている日本語の一つが「義実家」です。

配偶者の親なら「義父」「義母」、同じく配偶者のきょうだいなら「義姉」「義兄」「義妹」「義弟」というのはわかります。しかし、配偶者の実家のことを「義実家」というのは、最近になって目にするようになってきた「新語」で、「偽実家」のようにも聞こえ、あんまり感じがよくないなあ。

辞書にはまだ載らないようですが、ネットには賛否両論あるようです。以前の言い方だと「妻の実家」「夫の実家」。これだと長たらく、説明っぽいので、「里」という総称もありましたが、やや古めかしいというのが、「義実家」が支持される理由らしい。「義理の」と「実の」をくっつけたところが違和感を抱かせるのではなかろうか？



昔、留萌はテトラポッド
の生産量が日本一だった

けあらし

「けあらし」って、知っているだろうか？

海水温が気温より暖かくなった冬の朝などに、水面から水蒸気が立ち上る光景です。風呂の湯気のようなものです。例の『北海道海岸方言辞典』にも、「海水と大気の温度の差によって発生する海上に立つ水蒸気」と説明されています。広辞苑には「気嵐」の字が当てられ、「蒸気霧(じょうきぎり)に同じ」との説明。大辞泉では「毛嵐」の字が当てられ、「海面から立ち上る水蒸気が、陸上からの冷たい空気に触れて発生する霧。川・湖の場合にもいう。厳寒期の北日本に多い」とあります。なるほど。ネットで「けあらし」を検索すると、ほとんどがこの広辞苑か大辞泉の語釈を引いているようで、漢字は「気嵐」か「毛嵐」、海のほか、川や湖にもいう、となっています。おそらく、本州の人はもちろんでしょうが、道内でも、内陸ではあまり使われないかもしれません。

以前、たしかテレビの気象予報士が、けあらしというのは、もともと海の現象をいうので、川や湖にはいわない、といていたような気がします。先日も、UHB では、海の現象はけあらし、川は川霧といって区別していました。NHK も川霧と言いい、けあらしとは言っていませんでした。HBC では川に立ち上っている水蒸気を「けあらし」と呼んでいました。どちらが正解なのかわかりません。正式な気象用語ではないそうです。

ネット情報ではほかに、「北海道留萌地方発祥の気象方言」なんていう説明もありましたが、「気仙沼けあらし」なんていうサイトもあったりして、真偽のほどはわかりません。が、たしかに留萌の人は、冬のうんとシバれた日には、「港からけあらしが立ってる」と言っていました、川には言っていませんでした。

いまは、吹雪けばすぐ、必ずといっていいほど留萌の映像がニュースで映されますが、ボクが子どもの頃は、留萌で死傷者の出るような大きな交通事故があっても、翌日に写真か、録画映像が流される程度で、現場から生中継というのは、まずありませんでした。厳冬期にロシア船が前浜で座礁したとき、あまりに吹雪が続くので、乗組員をなかなか救助できなかったことがありました。最終的には岸から船に「モリ」を打ち込んで、そのロープに魚かごをつけて、ゴンドラのようにして救助する様子を、いつも「前日の映像」として放送されていた記憶があります。なにかの大きな事故の際、放送局のクルマに大きなパラボラアンテナを立てて、「衛星中継」で映像を流したときには、あ、留萌が生中継されている!とびっくりしたものです。いったん留萌から宇宙へ飛ばした映像が旭川から札幌の放送局が受信する。ああ、留萌は宇宙並みの僻遠の地なのね、と思ったものでした。

なおざり／おざなり

「なおざり」と「おざなり」。非常によく似ていて、ボクはいつも悩まされる語です。

辞書の説明では、もともと別語だが、近年、混用されると説明される。

A「なおざり」○真剣に取り組まないようす。いいかげんにほうっておくようす。(三省堂国語)

○言動に心がこもっていないで、することが万事不十分な様子だ。(新明解)

○物事を軽くみて、いい加減にしておくこと。おろそか。(明鏡)

B「おざなり」○その場のまにあわせにするようす。いいかげん。(三省堂国語)

○その場限りのまにあわせ。いいかげん。(新明解)

○誠意のない、その場かぎりの間に合わせであること。(明鏡)

では、次の用例の～に入るのは、Aなおざり、Bおざなり、どちら？

「～な謝罪」B 「対策が～になる」A 「～の仕事」B 「～な態度」A 「～の環境保護対策」B

「家業を～にする」A 「～な挨拶」B 「品質を～にして利益だけを追求する」A

「～に報告して済ます」B 「計画を～にする」A 「自分の健康を～にする」A 「～な返事」AB

最後の「～な返事」だけは、A・B両方の用例が辞書に載っていました。おもしろいものですね。



新聞で情報を得ることの効能

いまはスマホがあれば、ニュースも情報も入手できるから、新聞なんていない、テレビもない、と考える人が増えているようです。

しかし、ボクはそうは思いません。



新聞を読むことの効用はいくつでも挙げることが出来ます。まずは、活字に信頼性があること。ネット記事の中には、内容的にも、文章表現的にも信用度の低いものに出会うことが少なくありません。新聞はたくさんの人の校閲を経ていますから、そのようなことはほとんどありません。吟味された内容、練られた文章ということです。

次に、世の中のさまざまな出来事、話題、情報をまんべんなく提供していますから、いやでも(見出しだけでも)目に入る。そして、「おや?」と思う記事に出会うこともある。ネットだと自分の興味ある情報しか開かない。世の中をざっと概観する、ということが出来ません。そしてネット記事だとすぐに消えてしまう。新聞はモノとして残っているから後で読むことも読み返すことも可能です(これは電子辞書と紙の辞書との関係にも言えます)。

そして新聞は、立ち止まって考えることも、別の資料で深掘りする(調べる)ことも容易です。考えたり調べたりできる資料なのです。考えると言うのは、「なぜだろう」「どういうことだろう」「自分はそう思わない」ということです。

このように、新聞で情報を得るということは、「アタマを使いながら読む」、すなわち、賢くなれる情報取得手段であると言うこと。ネットは確かに即時性には優れていますが、ずっと素通りしてしまっ、立ち止まって考える習慣をなくしてしまいがちです。好みの話題にしか触れなくなります。これでは「主権者」として、社会のあり方を考えることのできない人になってしまいます。すべてお上の言うとおりに、でいいのでしょうか。

たしかにボクも新聞のすべての面に目を通すかと言えば、国際面は見出しをさーっという感じだし、株価とスポーツ面は見ません。しっかり読む面とそうでもない面はありますが、ネット記事の取捨選択とは違ってきます。このまえ、誰だったか、テレビに出ているコメンテーターなる人も言っていました。やはり新聞だといやでもいろんなニュースの見出しが目に入ってくるので、何が起きているのかに気づくことが出来る、ネット情報はそこが弱いと。

新聞を、本を読んで、考えて、時には文章にまとめる。そんな地道な、アナログな行為が人の頭を賢くすると思います。読もう、書こう、考えよう。とくに、年若い今のうちにそういう習慣づけをしておこう。若いうちに頭を使うめんどろな習慣を体験していないと、年取ってからはもちろん出来ません。賢くなる土台を、いま作っていきましょう!

ちなみに、ボクは大学に入った年から、つまり18歳から新聞は毎日読んでいます。大学1年生の時は学生寮に入っていたので、寮生用の新聞を。その年一番記憶に残っている新聞記事は、10月の「常用漢字制定」の記事だったことを覚えています。2年生からはアパート住まいになりましたが、ずっと新聞は購読し続けました。まあ、いまのようなスマホ、パソコンはもちろん、テレビすらなかったからね。たまに友達のアパートに行くと、違う社の新聞を読ませてもらったり。

複数紙購読と言えば、こんな話があります。ボクの家(旭川)の近くにむかし下宿屋をしていた方がいました。



その奥さんがいうには、以前、東高の生徒が2人下宿していて、2人別々の新聞を購読していたそうです。そしてお互いに交換し合って読んでいたと。全国紙2紙なのか、地方紙と全国紙だったのかは聞きませんでした。それにしても、高校生が下宿先で新聞を取っていて、しかも同じ下宿生と違う種類の新聞を読み合っていたなんて、すごいなあ!と感心しました。2人とも本州の有名な大学に行くと聞きました。

本の新聞広告も貴重な情報源

拾う／捨てる

「拾う」の反対語は、言わずと知れた「捨てる」である。では、次のような場合は、「拾う」と「捨てる」とを、反対の意味で使うでしょうか？

「車を拾う」「タクシーを拾う」……「車を捨てる」「タクシーを捨てる」

「捨てる」方はあんまり言わないでしょうね。かろうじて「タクシーを乗り捨てる」ぐらいは、小説なんかで目にするかもしれません。

ところが、ちょっとまえの日本語では、「車を捨てる」という言い方がごく普通に行われていたようなんです。漱石や田山花袋の小説には出てきます。



広辞苑①不要のものとしてものを手元から離す。「武器を捨てる」「車を捨てて歩く」

②見放す。構いつけなくなる。「妻子を捨てる」「学問を捨てる」

③大切なものを投げ出す。「名を捨てて実を取る」

以下略。例文「妻子を捨てる」が③の用例ならまだいいが、①の例文だったら穏やかではないね。

他の辞書にはこんな意味・用法もある。

大辞泉④持ち続けてきた思いなどをなくす。熱意や関心などがさめてしまう。あきらめて手を引く。「希望を捨てる」「最後まで勝負を捨てない」

というようなものもありました。なお、大辞泉ではこのような説明もありました。

大辞泉⑦乗り物を降りて、さらに先へ行く。「タクシーを捨てて歩く」

辞書っておもしろいね。他の辞書にも「夢を捨てる」「希望を捨てる」「迷いを捨てる」「野心を捨てる」「恋人を捨てる」と、用例は多彩(最後のは笑ってしまいました)。

「捨てる神あれば拾う神あり」なんていうことわざもあります。ぜひ、希望だけは捨てないで。

訃報

(日々、YKKのネタ＝記事は書きためており、せっかく編集しても、発刊直前に別のネタと差し替えることがあります。そうやって**お蔵入りしている記事**が実はたくさんあります。以下2本は、そんな中から**昨年春頃**に書いたものらしく……)

作家・西村賢太氏は昨年2月5日に54歳で、画家・原田泰治氏は3月2日に81歳で、作家・西村京太郎氏は3月3日に91歳で亡くなっています。)

西村賢太のあまりにも若すぎる訃報には驚きました。『苦役列車』、なかなか出会えない類いの小説でした。

偶然にも同じ西村が続き、ミステリーの大家・**西村京太郎**も亡くなりました。西村京太郎氏は昭和5(1930)年の生まれで91歳。同年生まれの作家に野坂昭如氏、半藤一利氏がいる(両名ともすでに故人)。ボクの親世代の人ですが、どんどん戦後が遠くなっていくような気がします。

さらに**原田泰治**氏の訃報にも驚きました。好きでしたね。この方の画風。画集も持っています。長野の美術館にも行きました。講演会にも行きました。80歳を超えたらそりゃいつかは、とは思うものの、やはり寂しいもの。そしてボクもせいぜいあと20年。いや、人生はあっという間です。「人生は何事をも為さぬには余りに長い、何事かを為すには余りに短い」(『山月記』より)。

NHK総合、毎土曜あさ5:40から「あのの人に会いたい」という番組があります。西村賢太さんも原田泰治さんも取り上げられました。そんな知っていた人ばかりでなく、へえ、こんな人がいたんだ、とか、この人はそういう人だったんだ、と感心させられる場合も少なくありません。NHKは各界著名人へのインタビュー映像も豊富に所蔵しているようで、ずいぶん昔のインタビュー映像が見られたりもします。いい番組だと思います。

あずる

以前、某ラジオ番組で「あずる」という言葉を知っていますか？使いますか？というリスナーアンケートをやっていました。通勤途中なので、10分弱しか聞いていませんでしたが、メインキャスターとアシスタントともに「知らなかった」とのこと。リスナーからは「知っている」「使っている」から、「聞いたことない」までいろいろのようでした。ボクの父親はよく使っていたのを覚えています。

むかしは道路の除雪も良くなかったので、轍(わだち)なんかにはまって抜け出せなくなることを「あずる」と言いました。他にも雪国ならではの方言もきっと多いと思います。ボクも若いころ、冬場の長距離運転の際にはクルマのトランクに、ヘルパー(あずったときにタイヤの下に噛まして脱出するための鉄板)やらスコップやら砂やら毛布やら積んで走りました。いまはあずる場面が、そうそう無いからねえ。最近は「スタック」なんてしゃれた言い方をするようですが。

沖縄のタクシー運転手さんは、「紅葉(こうよう)」という言葉は知っているけど、見たことはないなあ」と言っていました。無論、「雪」もでしょうなあ。



新聞切抜き読み

ここに取り上げた記事は、図書館前掲示板に掲示中です！
館内には北海道新聞(当日)・朝日新聞(前日)・あさひかわ新聞(週刊)の3紙があります。新聞を読む習慣を！

▼「在宅勤務 募り続けた妻への不満」 朝日新聞 1/17

コロナ禍により、まともな学生生活を送れず、友人も作れなかった大学生がいよいよ4年生。就職活動も始まっていますが、「学生時代に力を入れたこと」(これを近ごろは「学チカ」というのだそうですが)を答えるのは難しいといいます。

いっぽう、この記事では、在宅勤務の増えた夫婦の関係を報じています。夫がパソコンに向かい仕事をする傍らで、妻は隣でスマホを見ている。「僕は頑張っているのに、なぜこの人は遊んでいるんだろう」。やがてこの夫婦は離婚に至ったそうです。

コロナは若者から高齢者まで、さまざまな人間関係をも変えたという話の一つです。

小学校のころだったと思いますが、同級生が「働かざる者、喰うべからず」と言っていたのを思い出します。最初は意味が分からず、そんな難しい言葉を口にする同級生にたまげたものですが、彼は兄や姉が何人いても、商売をしている大家族の末っ子で、いろんな言葉を知っており、尊敬しました。

▼「とうとう定員割れの教員採用試験 大分県」 朝日新聞 1/20

昨年度も全国の教員採用試験の倍率低下が話題になっていましたが、今春採用の教員採用試験でとうとう「定員割れ」となった県が報告されました。大分県です。さらに東京都では、とうとう「教員免許がない人でも採用」を打ち出したとか(同1月23日付け)。

第3期でこんな本を入れています。教員志望者もそうでなくても、読んでみませんか？ ⇒新着図書の棚

『使い捨てられる教師たち』の知られざる実態 一非正規教員の研究 佐藤明彦 時事通信社

▼「高校生の半数 睡眠に問題」 朝日新聞 1/29

日本の高校生の睡眠時間は、世界的に見ても最短の部類で、深刻だという。睡眠不足は身体的、精神的にさまざまなリスクを高めるらしい。取材を受けた医師は「医療の力だけでは解決できない、社会や家庭の問題でもある」といい、睡眠障害や起立性調節障害などの治療方法などについても言及しています。

▼「ケアワーカーがいなくなる 上野千鶴子さんに聞く」 朝日新聞 2/2

深刻なケアワーカー不足の要因は、待遇改善が進まないことだと、上野さんは言う。上野千鶴子さんは元東大教授、社会学者。『おひとりさまの老後』がベストセラーに。

介護職の給与が不十分なままなのはなぜか。介護保険のあり方、ケアワーカー不足の解決策は。いつもの歯に衣着せぬ明快な答えが返ってきてます。

▼「日本産卵 香港で市民権」 朝日新聞 2/8

香港で「TKG(卵かけご飯)」が人気なんだそう。日本産の鶏卵、コメを使う店が増えているという。

▼「高校生の『化粧禁止』に反対」 北海道新聞 1/25

「読者の声」欄に投稿された、12歳の小学生の文章です。彼女は多くの高校が校則で化粧禁止にしていることが不思議で、その理由を詳しく調べたそうです(どうもネットだけのようですが)。賛否両論あったそうですが、彼女自身は「化粧禁止には反対だ」とのこと。その理由は……。読んでみましょう。

▼「給食や学用品無償化 マイナカード必須も」 朝日新聞 2/2

岡山県備前市は新年度、給食費などを無償にする対象を、世帯全員がマイナンバーカードを取得した児童らに限るという。世帯全員がカードを取得することを条件に、申請すれば給食費を免除する、という、まあ、「お上からのお触れ」のような通知文が出されたというのだ。

じつは自治体側にも事情がある。それは、政府が、カードの普及率を地方への交付金に反映させるからだ。カード取得の進んでいない自治体には、交付税など、国から地方への財源を減らすという話だ。だから自治体もなりふり構わず、カード取得へ向けた知恵を絞っているというわけだ。

でも、それってどうなんだろう？子どもの給食費を人質にとって、マイナカードの普及率を上げる・・・だがしかし、「お上の事には間違いはございませんまい」からなのかも・・・(森嶋外『最後の一句』より)。

▼「戸籍に読み仮名追加 改正案 名前の読み方『一般に認められているものに』」 朝日新聞 2/3

常用漢字表には「音・訓」の読み方も規定されているので、当て字・当て訓のような使い方は原則としてしないのが現代表記のルールです。漱石の時代などにはそのようなものはなかったの、実に自由に漢字が使われています。それでは読み書きが不便だということで、戦後、「当用漢字表」が制定され、使用できる漢字の種類とその音・訓が制限されたのです(昭和56年に常用漢字表に改訂)。



ところで、名前に使える漢字の範囲は規定されていた(常用漢字と人名用漢字)ものの、どう読むかの規定はなかった。「名前の読み方」、これを「名乗り」といいますが、歴史を踏まえて「自由」ということになっています。

たとえば、「頼」という字の音・訓は、常用漢字表に「ライ・たのむ・たのもし・たよる」、「朝」は「チョウ・あさ」と示されているわけですが、「源頼朝」の「頼」は「より」、「朝」は「とも」と、いずれも常用漢字の音訓にはない読みですね。こういうのを「名乗り訓」といいます。

近年、個性的な名付けが多くなり、ときには読みにくいと思われる名前に出会うこともあります。そういう法令上の扱いなんですね。そして、出生届には振り仮名の記入欄があっても、戸籍にはあえて希望しなければ振り仮名は記載されなかった。だから、早い話、どう読んでも差し支えない、ということになっていた。

今回、これを「戸籍にも振り仮名」、つまりどう読むかを記載するようにする法改正を行うということなんですね。なぜか。それは、マイナンバーの海外使用が始まるのに合わせた名前のローマ字表記、行政手続きのデジタル化促進のため、すなわち読み方がわからないと不都合が生じるからということらしい。

そこで、出生届を受理する役所の窓口では、これまでは「その漢字は使えません」だけだったのに、今後は「その読み方では受理できません」ということになるかもしれません。よく例に出されるのが「光宙」と書いて「ぴかちゅう」と読ませるのはありや否やというのがありますが、今後は認められるのかどうか。

ただ、「〇〇と書いて□□と読みます」とか、「□□と言いますが、〇という字に〇という字を書きます」と、生涯説明し続けなければならないようでは不便でしょうから、ある程度は名付けられる子どもにとっても利益があるのかも知れません。ボクなんか(父親もそうだったようですが)、名字を説明するのが不便で面倒だったので、子どもにはせめて名前の方では苦労させないように、読みやすく書きやすい字を名前に選びました。

▼「やめる農家 道内増加 この1年200戸の見通し」 北海道新聞 2/15

▼「壊れる食 飢える国」 北海道新聞 2/15

いま道内の酪農家が大変な苦境に立たされているのをご存じだろうか？借金を背負って規模拡大してきたのに生産調整で生乳を廃棄させられ、せっかく育てた雌の子牛も二束三文。廃業する酪農家が増えているという。

これに関しては、今回購入した下記の本の解説が非常にわかりやすい。日本の食料自給率、食の安全保障といったことにもっと私たちは関心を払わなければならないと痛感しました。

最近ボクは、1丁60円ほどの外国産大豆による格安豆腐を避け、1丁150円でも国産大豆の豆腐を買うようにしました。これは、小麦粉も同様です。どうしてこんなに外国産小麦粉が安いのか、知ればきっと口にはできなくなると思います。

『世界で最初に飢えるのは日本 食の安全保障をどう守るか』 鈴木宣弘 講談社+α新書

⇒新着図書の棚

＊ ＊ 第4期購入図書決定！ ＊ ＊

本年度最終4期分の購入図書が決定しました。

今回も生徒・教職員のみなさんからのリクエストの他、シリーズものの続き、古くなった本の更新、教科学習や探究学習・小論文・進路学習・教養全般に役立ちそうな本、行方不明本の補充、教科書に載るような作家・作品の複本化、地域に関連する作家・作品の複本化といった観点で日々選書に努めました。ご利用ください。

	タイトル	著者名	出版社	NDC
1	勉強の哲学	千葉雅也	文春文庫	002
2	ファスト教養	レジー	集英社新書	002
3	学校図書館はカラフルな学びの場		ぺりかん社	017

4	学校図書館の司書が選ぶ中高生におすすめの本300		ペリかん社	028
5	もっとある学校図書館の司書が選ぶ 中高生におすすめの本220		ペリかん社	028
6	ミュージアムヒストリー 東京国立博物館		吉川弘文館	069
7	あたりまえなことばかり	池田晶子	トランスビュー	104
8	人生のほんとう	池田晶子	トランスビュー	104
9	声に出して活かしたい論語70	三戸岡道夫		123
10	日本史を暴く	磯田道史	中公新書	210
11	テーマで学ぶ日本古代史 第1巻、第2巻		吉川弘文館	210
13	人物で学ぶ日本古代史 第1巻～第3巻		吉川弘文館	281
16	人生はそれでも続く		新潮新書	281
17	「ふたつの悲しみ」秘話	杉山満丸	長崎文献社	289
18	三流シェフ	三國清三	幻冬舎	289
19	スウェーデン福祉大国の真相	近藤浩一	水曜社	302
20	コミュニケーションは、要らない	押井 守	幻冬舎新書	304
21	バカと無知	橘 玲	新潮新書	304
22	10代のうちに知っておきたい政治のこと	越智敏夫	あかね書房	310
23	13歳からの地政学	田中孝幸	東洋経済新報社	312
24	中高生からの選挙入門	なるには BOOKS	ペリかん社	314
25	知らないと後悔する日本が侵攻される日	佐藤正久	幻冬舎新書	319
26	ウクライナ戦争と米中対立	峯村健司	幻冬舎新書	319
27	ボーダー	佐々涼子	集英社	329
28	お金の向こうに人がいる	田内 学	ダイヤモンド社	330
29	未来の年表 業界大変化	河合雅司	講談社現代新書	334
30	物価とは何か	渡辺 努	講談社	337
31	「人それぞれ」がさみしい	石田光規	ちくまプリマー新書	361
32	大都市はどうやってできるのか	山本和博	ちくまプリマー新書	361
33	若者と労働	濱口桂一郎	中公新書	366
34	お隣は外国人		北海道新聞社	366
35	母親になって後悔してる	オルナ・ドーナト	新潮社	367
36	ぼくは福祉で生きることにした	河内崇典	水曜社	369
37	君は君の人生の主演になれ	鳥羽和久	ちくまプリマー新書	371
38	ほんとうの道德	苫野一徳	トランスビュー	371
39	学校はなぜ退屈でなぜ大切なのか	広田照幸	ちくまプリマー新書	371
40	最新教育動向2023		明治図書出版	372
41	「現代の国語」はなぜ嫌われるのか	笠原美保子	学而図書	375
42	看護学部 保健医療学部		ペリかん社	376
43	女子学生のキャリアデザイン	野村康則	水曜社	377
44	アイヌ文化史事典		吉川弘文館	382
45	人類の起源	篠田謙一	中公新書	469
46	寿命が尽きる2年前	久坂部羊	幻冬舎新書	490
47	ドーパミン中毒	アンナ・レンブケ	新潮新書	491
48	世界で一番美しい人体図鑑	奈良信雄	エクスナレッジ	491
49	言語化の魔力	樺沢紫苑	幻冬舎	498
50	気候変動と環境危機	グレタ	河出書房	519
51	主夫になってはじめてわかった主婦のこと	中村シェフ	猿江商會	590
52	食べものから学ぶ世界史	平賀 緑	岩波ジュニア新書	611
53	世界で最初に飢えるのは日本	鈴木宣弘	講談社+α新書	611
54	神々の復讐	中山茂夫	講談社	654
55	商店街はいま必要なのか	満蘭 勇	講談社現代新書	673
56	キングダム21～30	原 泰久	集英社	726
66	理想の国語辞典	国広哲弥	大修館	813
67	名著入門 日本近代文学50選	平田オリザ	朝日新書	910
68	尾崎放哉句集		岩波文庫	911
69	山頭火俳句集		岩波文庫	911
70	羅生門・鼻・芋粥 改版	芥川龍之介	角川文庫	913
71	羅生門・鼻 改版	芥川龍之介	新潮文庫	913
72	杜子春	芥川龍之介	角川文庫	913
73	羅生門・蜘蛛の糸・杜子春 外十八篇	芥川龍之介	文春文庫	913
74	蜘蛛の糸・杜子春	芥川龍之介	新潮文庫	913
75	蜘蛛の糸・地獄変	芥川龍之介	角川文庫	913
76	何様	朝井リョウ	新潮文庫	913
77	少女は卒業しない	朝井リョウ	集英社文庫	913
78	星やどりの声	朝井リョウ	角川文庫	913
79	わが母の記	井上 靖	講談社文庫	913
80	しろばんば 改版	井上 靖	新潮文庫	913

81	あすなろ物語 改版	井上 靖	新潮文庫	913
82	夏草冬濤 上 下	井上 靖	新潮文庫	913
84	だれもが子供だったころ	内海隆一郎	河出文庫	913
85	5分後に・・・シリーズ	エブリスタ編	河出書房新社	913
92	永遠年輕	温 又桑	講談社	913
93	水 本の小説	北村 薫	新潮社	913
94	カレーライス 教室で出会った重松清	重松 清	新潮文庫	913
95	ビタミンBOOKS さみしさに効く読書案内	重松 清	新潮文庫	913
96	娘に語るお父さんの歴史	重松 清	新潮文庫	913
97	卒業ホームラン	重松 清	新潮文庫	913
98	人間失格・桜桃	太宰治	角川文庫	913
99	人間失格	太宰治	新潮文庫	913
100	川のほとりに立つ者は	寺地はるな	双葉社	913
101	青梅雨	永井龍男	新潮文庫	913
102	東京の横丁	永井龍男	講談社文芸文庫	913
103	李陵・山月記	中島 敦	文春文庫	913
104	山月記・名人伝ほか	中島 敦	ちくま文庫	913
105	李陵・山月記	中島 敦	ハルキ文庫・新潮文庫	913
107	こころ 改版	夏目漱石	新潮・岩波・集英社文庫	913
110	こころ 坊ちゃん	夏目漱石	文春文庫	913
111	5分後に犯人に迫るラスト	藤白 圭	河出書房新社	913
112	5分後に衝撃のどんでん返し	藤白 圭	河出書房新社	913
113	意味が分かると怖い話	藤白 圭	河出書房新社	913
114	スマホに届いた怖い話	藤白 圭	河出書房新社	913
115	怖い物件	藤白 圭	河出書房新社	913
116	道ありき	三浦綾子	新潮文庫	913
117	この土の器をも 改版	三浦綾子	新潮文庫	913
118	光あるうちに 改版	三浦綾子	新潮文庫	913
119	天北原野 上 下	三浦綾子	新潮文庫	913
121	青い棘	三浦綾子	三浦綾子文学館	913
122	石の森	三浦綾子	三浦綾子文学館	913
123	嵐吹く時も 上 下	三浦綾子	三浦綾子文学館	913
125	羊をめぐる冒険 上 下	村上春樹	講談社文庫	913
127	舞姫 現代語訳	森 鷗外	ちくま文庫	913
128	舞姫・うたかたの記	森 鷗外	角川文庫	913
129	山椒大夫・高瀬舟	森 鷗外	新潮文庫	913
130	山椒大夫 高瀬舟 阿部一族	森 鷗外	角川文庫	913
131	生きるかなしみ	山田太一	ちくま文庫	914
132	大丈夫じゃないのに大丈夫なふりをした	クル・ベウ	ダイヤモンド社	929
133	夜と霧 新版	フランク	みすず書房	946

読みどころ

No.7・8の池田晶子はおすすりです。No.47・53も考えさせられます。経済系で推薦などを狙っている人はNo.55のようなのは要チェック。No.101・102永井龍男、しみじみとして好きだなあ。全集本も3冊あるよ。芥川・漱石・鷗外・中島敦などの各社文庫版を更新してみました。昔の版と違って、紙質もよくなり、文字も大きくなっています。井上靖、三浦綾子も読んでね。

毎年入れている本

『日本国図会』・『世界国勢図会』 この2冊は、ボクも小論文の例題を作ったりするときに活用しています。みなさんも、「食料自給率」とか「人口動勢」「地球温暖化問題」などを、統計とともに知ることをおすすめします(先生方も活用ください!)

『最新教育動向2023』 今期購入(No.40)のこれは2021年版を入れたところでしたが、毎年出されるようです。教員志望者も多いようですので、教育界の最新事情、用語などをこれで勉強することをおすすめします。

返却日を過ぎた本はいったん返してね!

新聞・本

そうだ! 図書館へ行こう! 活字を読んで賢くなろう!!

三浦綾子記念文学館・井上靖記念館・旭川文学資料館にも行ってみよう!

(文責 伊丸岡圭一)